

魔法の種 プロジェクト 活動報告書

報告者氏名： 徳永 みき 所属： 鹿屋市立寿小学校

記録日： 平成28年 2月16日

【対象児の情報】

○学年

小学1年生・特別支援（情緒）学級在籍

○障害名

知的障害を伴う自閉症

○障害と困難の内容

- ・服装、髪型、持ち物に対してこだわりがある。
- ・話をする時、目が合わない。理解力はそれなりにあるが、返事はあまりしない。
- ・見通しがつけづらく、自分が今やりたいことを優先してしまう。
- ・機嫌がよくなると、自分の世界観に入りこみ、アニメの変身ポーズを楽しむ。一人遊びが多い。
- ・言葉の使い方を習得しておらず、言いたいことがうまく伝えられない。
- ・自分の名前は書けるが、まだ文字は理解していない。



【活動目的】

○当初のねらい

- 1 学習する場所を覚え、1日の流れを理解し、移動や着替えを自分ですることができる。
- 2 自分がしたいことや行きたい場所を相手に伝えることができる。
- 3 写真を手がかりに、自分のしたことや好きなことを相手に伝えられる。

○実施期間

平成28年5月～平成29年2月16日

○実施者

徳永 みき

○実施者と対象児の関係

支援学級（情緒）担任

【活動内容と対象児の変化】

○対象児の事前の状況

- ・学校生活の流れや時間割の意味理解、机上の学習に取り組む姿勢はまだできていない。
- ・見て学ぶことが得意で、友達の様子を見ながら、その場を共有し、回数を重ねることで部分的に参加できる活動が増えつつある。一斉指導や集会活動では、集中力が途切れると、寝転んだり、歩き回ったりする。
- ・ままごとが好きで、台所で使う物の名前はよく知っている。また、アニメの影響を受けた言葉遣いが多く見られ、語彙数は多くなく、使う場面や使い方を誤っている場合もある。言葉によっては、発音が不明瞭で伝わりにくいものもある。
- ・絵本を見ながらストーリーを考えたり、ままごと遊びをしたり、アニメのキャラクターの真似をしたり、一人の世界観で遊んでいることが多い。

<困り感からの達成目標>

- ①時間割の意味や何をすればよいのかわからない。→一日の流れがわかり、移動や着替えを自分でできる。
- ②伝える方法を知らないため、黙ってその場を立ち去る。→自分がしたいこと、生きたい場所を伝えられる。
- ③自分の知っていることが伝わらない。→写真を手がかりに、自分のことを伝えられる。
- ④不安感からの様々な物に対するこだわり。→心の安定を図り、安心感を持つ。



(1) 時間割の確認。

支援学級、交流学級、体育館等、学習する場所が様々なため、まずは学習場所への移動ができることを目標に、場所の写真を用いた時間割の確認をホワイトボードで行った。その後、声かけと写真確認で教室移動ができるようになり、また、聞いた音をよく覚えるという実態がわかってきたので、タブレットのイラストと音声を利用し、学習内容を意識した時間割確認を行うことへ移行した。

第1次 学習場所の理解

教師とスケジュールボードにカードを貼り、一日の流れを確認。スムーズな教室移動のため、場所の写真（教える先生の写真入り）を使用した。

第2次 学習内容の理解

将来的には自分で確認できるようになることも視野に、タブレットのイラストと音声で学習内容（教科名）を意識させるようにした。



① ホワイトボード



② タブレット

(2) できる見通しを持つ。

視覚的な時間表示

着席する習慣をつけるために、タイムタイマーをセットし、視覚的に目標時間を表示。達成できる見通しを持たせるために、短い時間（10分）からスタートすることで、一定時間課題に取り組む習慣をつけていった。



② 自分がしたいこと、行きたい場所を伝えられるために。



(1) 場所の名前を知る。

授業中、興味が他に移ってしまうとふらっとその場を立ち去る。居場所がわからなくなると危険なので、どこか行きたい時には先生に必ず伝えてからその場を離れるように本人と約束した。入学後すぐは場所の名前を知ることと、伝える方法を簡易にするために、以下のような手立てをとった。

第1次 指さして伝える

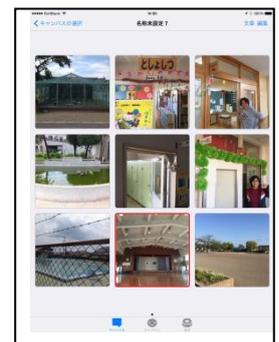
校内の様々な場所の写真を教室内の移動式黒板に掲示し、言い方を確認したり、実際行きたい時には、指させたりできるようにした。

第2次 言葉で伝える

教師と一緒にタブレットで、校内の場所の名前辞書を作り、写真と音声で場所の名前を言う練習を行った。タップすればすぐ音が出るので、遊び感覚で聞くうちに、覚えていくことができた。



① 移動式黒板



② タブレット

(2) 伝える習慣をつける。

相手を意識する

その場を離れる時には必ず伝えることを約束し、毎回、教師のモデルを繰り返してから移動するように促した。相手を意識させるため、目を見て伝えること、先生とタッチしてから移動することを意識的に行った。

(1) 関係を支える。

保育園からの流れで、他児童はAさんを自然な形で受け入れてきた。しかし、1年生ということもあり自分のことで精一杯で、声をかけてくれる児童は少なかった。そこで、Aさんを少しでも理解し、声をかける機会が増えれば、よりAさんが安心して自分を出せるのではないかと考え、11月に交流学級にて理解教育を行った。

実際の授業の流れ

(1) Aさんについて思っていることを聞かせてもらった。

(2) Aさんの困り感についての説明と体験。

<体験の内容>

・シャワーカーテンごしに、一人の児童に黒板を消す真似をしてもらう。遠い場所から少しずつカーテンに近づいてもらい何をしているのか他の児童に当ててもらった。初めは何をしているのかわからない状態から少しずつ何をしているのかわかる状態にして、Aさんが少しずつ物事の理解をしていくことの疑似体験をさせた。



自分の名前が出るたびにうれしそうに笑うAさん

(3) Aさんにできることをみんなで考えた。

(4) Aさんのお母さんからの手紙の朗読。

(5) Aさんへ一人ずつ手紙を書いた。

(2) 伝える手段を持つ。

① 「My写真辞書」

語彙力（伝えたい言葉）を増やすため、興味を持っていることや物などを写真撮影し、それに音声を入れて、「My写真辞書」をタブレットに作成した。（初め教師主導で作成。音声は本人。）写真だと、思いついた時、すぐに簡単に記録することができる。また、慣れてくると、一人でも操作して、作成していくことができるようになった。

② 「音の出ることば辞典」

Aさんが覚えたいとシンボルの中から選んだ言葉（ア）や、授業中学習した絵カードの中で言えなかった物の名前（イ）を、家庭で実際使っている物を母親に写真に撮ってきてもらい、それに本人の音声でタブレットに記録し、言う練習を行った。



①My写真辞書



②音の出ることば辞典(ア)



②音の出ることば辞典(イ)

(1) 情報の共有

夏休み明け、不安定な時期が続き、学校に行きたがらなくなり、服装へのこだわりが増し、できていた活動もなかなか参加できなくなっていた。そこで、家庭や病院など多方面からの支援を図り、本人の心の安定を図る方法を模索した。

① 母親とのSNS

頑張っている様子を写真にとり、母親にメールで送信。母親からボイスメッセージを送信してもらった。また、学校での出来事を家庭でも話題にもらった。

② 病院との連携

病院で行っているリハビリの内容を保護者に撮影してきてもらい、内容の共有。また、保育所等訪問事業の利用や定期的な情報交換で、今必要と思われる支援の情報交換をし、方向性を確認し合った。



①母親とのSNSのやり取り

②リハビリの様子ビデオ

○対象児の事後の変化

①、②について

○授業中の態度については、本人なりに理解を深めている時間と捉え、外を眺めたり、友達の様子を見ていたりしていても無理はさせず、少しずつ活動に誘うことを心がけた。

そのような中で少しずつAさんに変化が見られ始めた。

①について

- ☆毎時間、写真で場所を確認するだけで、教室移動することができるようになった。
- ☆交流学級の学習に部分的ではあるが参加できるようになってきた。一度着席してしまえば、時間いっぱい取り組めることもある。
- ☆制服・体育服が着られるようになった。

②について

- ☆「トイレ。」「のどかわいた。」「手が（よごれたので）、いいですか。」と、行きたい場所を伝えてから教室を出るようになった。
- ☆「うさぎ小屋。」と伝えてから行くことができた。

③について

☆昼休み、友達がかくれんぼの時、少し見つけやすいところにかくれてくれるようになり、一人ままごとや風に当たって楽しむ遊びから、集団遊びへと変化してきた。「かくれんぼしよう。」と自分から誘ったこともあった。

☆集会の時、友達と一緒に体育館へ移動するようになった。

認め合いからの安心感で

☆タブレットの中に、友達の写真と名前を入れていたことから、その子の名前を覚え、手紙交換が始まった。

☆お気に入りのキャラクターになりきり自撮りした写真を友達と共有したりする中で、人との関わりを楽しむようになり、積極的に友達や先生に話しかけるようになった。

伝える手段の獲得で

④について

☆母親へ運動会の練習の様子や学校での出来事をSNSで送り、その頑張りを認めていく中で、少しずつ学校生活のリズムを取り戻していった。

☆拒絶していた制服も「へんしん」と言いながら、学校で着ることができるようになった。

☆この時期（9月）を乗り越えた10月からは、活動への参加を嫌がることが少なくなった。

☆病院でのリハビリと学校での学習内容を合わせていくことで、効果を上げていくことができた。

○報告者の気づきとエビデンス

(1) 主観的気づき

- ・じっくりと観察・視覚的な支援で、納得し行動に移せるようになってきたのではないか。
- ・安心感と伝える手段や語彙の獲得で、友達と関わろうとする気持ちが育ってきたのではないか。

(2) エビデンス

Aさんの学校生活における変化（連絡帳の記録より）

（4月・5月） 支援学級では、友達のする学習を時々座って見ている。交流学級では、窓辺に立っていて、ふらっと教室から出てしまう。トイレの失敗が続く。

↓

（6月・7月） スケジュールボードの活用で教室移動する。6月は午前中、寝てしまう日々が続く。生活習慣の改善をお願いし改善。しかし7月頃になると、交流学級に行きたがらない日が続いた。支援学級では生き生きと学習。教室を出る時「うさぎごや」と言える。

↓

（9月～12月） 夏休み明け、学校に行きたがらない日が続く。制服も着なくなり、できていた片付けもしたげられない。しかし、お母さんとのSNSのやり取りで落ち着きを取り戻す。10月よりタイムタイマーの提示を開始。プリント学習にも取り組めるようになる。11月からは交流学級の図工で同じ活動が。体育で鉄棒・長縄に参加。制服・体育服を着ることができるようになる。移動教室が習慣化。

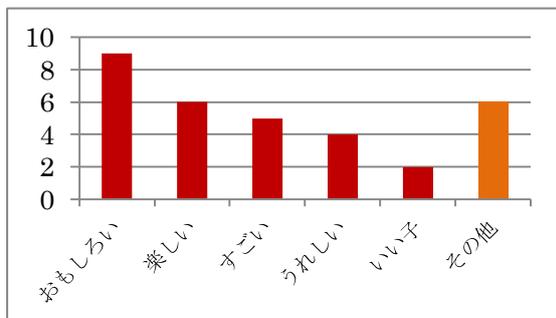
↓

（1月～2月） 体育で、長縄を自分でくぐるようになる。「雨ふってるね。」「風、気持ちいい！先生も気持ちいい？」「そうじの時間だよ。」「大根食べて。」「お兄ちゃんとゲーム遊びたい。」と自分から友達や先生に話しかける。友達の名前を他の人が呼ぶのを真似て呼ぶようになった。保護者から「最近自分からよく話しかけてくるようになりました。」とのコメント。

Aさんの中での変化

環境の変化に適応するのに時間がかかるAさんにとって、みんなの様子をじっくり観察する時間が必要で、理解し行動に移すまで時間はかかるものの、納得したことに関しては、葛藤を繰り返しながらも、できるようになったのではないか。そして、何より視覚的な支援で見通しを持たせることで、次への不安を取り除いていくことができてきたように感じられる。また、10分という目標を設定し、参加してみたいというタイミングを待つことで、交流学級でも学習することができるようになってきた。

周囲の理解について 交流学級児童へのアンケートより



Aさんと学習していて、Aさんのことをどう思いますか。

児童の手紙より

「いつもいっしょだよ。」 「ないときだってこえをかけてね。わたしもこえをかけるからね。」 「ずっとともだちだよ。」 「あそんでくれてありがとう。」 「Aさんは、えがとってもじょうずだね。」 「あそんでくれてありがとう。」 「わらっているAさんがだいすきです。」 「いつもげんきパワーでげんきにさせてくれてうれしいです。」

アンケート項目「Aさんと学習していて、Aさんのことをどう思うか。」では、「おもしろい」「たのしい」の解答が多かった。これは、授業中に発するAさんの言葉を自然に受け止めている結果だと思われる。ま

た、児童の日記より、Aさんを受け止め、仲間として受け入れている様子が伺える。

Aさんの友達に対する意識について



友達にタブレットの写真を見せている様子

2時間続きの運動会練習の間の休み時間、「写真撮りたい。」というのでタブレットを持っていくと、「するするフチ子さん」といってポーズをとった。My 辞書にこれを登録したのだが、教師が「するするフチ子さんで頑張ろう。」と声をかけると「うん。」と言って参加することが多くなった。(写真は、友達に自分の写真を見せて、フチ子さんを見せる様子。)

→自分の好きな分野を共有することから、他人との関わりにつなげていくことができてきている。

「My 写真辞書」に、友達の写真を収めた時、友達の予想外の姿を見て、初めは一人うけしていたが、写真に音声で友達の名前を入れていたことで、その友達の名前を覚えた。ある日、自分の名前を書いたものを、「お手紙」としてその子に渡していた。これをきっかけに、手紙交換が始まった。今では、お互い気にかける存在になっている。

→友達の名前を覚えることで、自分の中だけの世界ではない遊びに発展していている。

自分の好きな物を写真で相手に伝えられることや、友達の名前や身の回りの物の名前を覚え伝えることで、他の人とのつながりができてきている。楽しさを共有する経験の積み重ねで、学校生活の変化(1月～2月)からもわかるように、タブレットを持たない場面でも、周りの出来事に気づき、それを誰かに伝えようとする気持ちが育ってきている。

○ 今後の課題

Aさんにとって観察し納得、行動に移していくという過程はとても大事なので、これからもじっくり向き合い、そして無理なく理解を促す方法をこれからも探していきたい。また、選択肢をいくつか用意しておくことも効果があり、自分で選ばせるという方法をとると、制作活動に参加することができるようになっていく。今後、交流学級での図工・体育・音楽の学習内容を支援学級でも行ったり、動画で事前に活動内容を見せたりして、交流学級での授業へのやる気を引き出していきたい。